

地域 みんなで育てる公園 インクルーシブな遊び場づくり

よくある 5つの誤解

公園でのインクルーシブな遊び場づくりが各地で始まっています。
しかし、新たな取り組みならではの誤解も…。
よくある「5つの誤解」を例に、インクルーシブな遊び場づくりの留意点を解説します。

インクルーシブな遊び場とは、
個人の特性や背景などの違いにかかわらず
あらゆる子どもがともに遊び、育ち合える場です。

- ① だれもが利用できる
- ② 遊びが豊かである
- ③ 人や地域とゆるやかなつながりがある

この3つを軸に、地域のニーズを柔軟に反映した
遊び場づくりが求められています。

「遊び」は、障害の有無や年齢、経済的・社会的背景などの違いにかかわらず、すべての子どもの成長と発達に欠かせないものです。

多様な子どもがともに生き生きと遊び、地域の大人たちがその成長を見守り支え合えるインクルーシブな遊び場の創造は、インクルーシブな社会づくりにもつながります。

よくある5つの誤解

1 インクルーシブな遊び場って障害がある子どものための場所？

2 だれもが遊べるって、平らな地面に易しい遊具を置くこと？

3 住民参加には、ヒアリングかワークショップを1回実施すればOK？

4 めざすゴールは、「遊び場の完成」だよね？

5 インクルーシブな遊び場は、1か所あれば充分でしょ？

その答えは…

インクルーシブな遊び場って障害がある子どものための場所？

1

対象

いいえ。 年齢や性別、国籍、個人の能力、また経済的・社会的・文化的背景などの違いにかかわらず、「すべての子ども」のための場所です。

障害の有無に限らず子どもたちは一人ひとりが多様で、得意なこと、苦手なこと、関心のあることなどが異なり、それらは変化もしていきます。あらゆる子どもを歓迎できる遊び場をめざすことで、だれもが自分の力を発揮して遊べ、お互いの違いや共通点を認め合いながらともに成長することができます。

また公園の遊び場は、親たちや地域住民にとっても多様な人との出会いや交流の場となります。

だれもが遊べるって、平らな地面に易しい遊具を置くこと？

いいえ。 遊び環境を構成する要素は、遊具だけではありません。多様な子どもが遊びを通して幅広い力を発揮できるためには、変化に富んだ豊かな遊び環境が必要です。

遊び場全体のアクセスを確保したうえで、タイプや挑戦レベルの異なる遊び要素を吟味したり、植物・土・水といった自然の要素を豊富に取り入れたランドスケープを工夫したりすることで「遊びの価値」を高めましょう。

子どもたちが自ら遊びを選んだり、挑戦や発見をしたり、仲間と遊びを発展させたりできるよう、選択肢や自由度があることが大切です。

2

遊び

住民参加には、ヒアリングかワークショップを1回実施すればOK？

いいえ。 だれも取り残さないインクルーシブな遊び場の実現には、地域のニーズを幅広く出し合い、ハードとソフトの両面から柔軟に伝えていく必要があります。

多様な子どもや保護者をはじめ、地域活動団体、行政や企業、教育や福祉分野の人々などが連携し、遊び場づくりのプロセス全体を通して対話を重ねましょう。

またそれらの過程を随時公表したり、調査やイベント、寄付・ボランティアの募集など、さらに多くの住民が参加できる機会を設けたりすることで、地域の人々にインクルーシブな遊び場への関心や理解を広めることも大切です。

3

連携

めざすゴールは、「遊び場の完成」だよね？

いいえ。 めざすのは完成した遊び場が、多様な子どもを含む地域の人々によって利用され続けることです。ハードの不具合などを見つけて対処することはもちろん、積極的な情報発信や遊びのプログラムの提供、プレイワーカーの配置といったソフトの充実にも努めます。またそれらの効果を継続的に検証し改善していくことも大切です。完成したインクルーシブな遊び場が、あらゆる子どもや大人にとって居心地がよく、お互いの多様性やつながりを自然に感じられる地域の交流拠点となれるよう、みんなで育てていきましょう。

4

「育てる」

インクルーシブな遊び場は、1か所あれば充分でしょ？

いいえ。 1つの遊び場ですべてのニーズに応えることは不可能です。また遊び場は、子どもたちが日常的に通える圏内にあることが望まれます。

地域のあらゆる子どもの遊びを支援するために、特色が異なる第2、第3のインクルーシブな遊び場の整備に加え、小規模公園での部分改修や、継続的な遊びの支援活動など、より広い観点で取り組みましょう。安易に同じような遊び場を増やすのではなく、地域全体で多彩な遊び環境を保障していくことが大切です。

5

整備方針